

学校関係者評価書

平成23年度 第1回

南アルプス市立白根百田小学校

第1回 学校関係者評価委員会

- 1 実施日 平成23年8月30日(火) 午後4時00分～6時00分
- 2 会場 白根百田小学校校長室
- 3 参加者 学校関係者評価委員
小野 哲夫 小松 昭 小野 敏明 小池 正彦
小野 和明 内藤ふじ子 清水 学(委員長) 竹山真由美
学校職員
石川 正人(校長) 大柴 俊彦(教頭) 名取みち子(教務主任)
杉山 明美(生徒指導主任)
- 4 学校から提案された内容
 - (1) 学校評価システム並びに学校関係者評価についての概要説明(校長)
 - (2) 学校の自己評価について説明
 - 教職員による自己評価(教務主任)
 - 児童アンケート(生徒指導主任)
 - 保護者アンケート(教頭)
 - 2学期の具体的改善プラン(校長)
- 5 協議されたおもな内容
 - (1) 教職員による評価、児童アンケート、保護者アンケートについての考察
 - (2) 2学期の具体的改善プランへのアドバイス

学校関係者評価

- 1 基礎学力の向上に関わって
 - (1) 授業時数確保について
 - 様々な課題について、「行事」などのように特に取り出して教えるのではなく、通常の「授業」の中で意識的に取り上げる工夫を・・・。
 - 新指導要領のもと学習内容も増え、先生や児童の負担が増している中、ホッケーについては、本地区は人的にも物的にも環境が整っていることから、学校教育の中で実施するのではなく、スポーツ少年団として実施していくことを検討されたい。
 - (2) 授業の工夫(含む朝学習)について
 - 児童に競争心がない。これは、学習はもちろん、「あいさつ」をはじめ学校生活全体に言えることである。
 - 授業の中での「グループ」を工夫し、刺激し合い、学び会える体制づくりを工夫されたい。
 - 授業を聞かないというのは、聞かない側にも原因はあるが、教師側の話し方、内容など大いに関係がある。興味を持たせる話し方、おもしろい話し方など工夫も必要である。そのためにも、先生に余裕が欲しい。教職員の増員を望みたい。

○朝学習について・・・各クラスで刺激し合うことが大切である。よい意味で児童の「競争心」を刺激したい。また、上級生が下級生に教えにいく方法などはどうか？

(3) 家庭との連携について

○宿題と一言で言っても、ひとりひとりレベルが違ったり、また家庭の状況も多様化しているので、難しい面もあるだろう。先生と家庭の連携がしっかり取れていることが大切である。

○学校から呼びかけての家庭学習、生活習慣の一斉取り組みについては、もう少し検討が必要であると思われる。

○いわゆる「読み書きそろばん」の部分については宿題が有効である。宿題を終えたら親からサインをもらうなどの取り組みで、親子のふれあいの機会にもなる。

○宿題をやったことがきちんと評価されるような取り組みをお願いしたい。

2 あいさつに関わって

○あいさつは以前よりだいぶするようになったが、個人差、地域差、登校班による差がある。

○「声」をしっかり出してあいさつすることの大切さ・・・今の子どもは、ゲームやTVなど2次元との付き合いの時間が長く、人と接する時間が短い傾向にある。「ことば」や「表情」から喜怒哀楽を感じとることが重要である。例えば、目の見えない方や耳の聞こえない方にも通じるようなあいさつの仕方を考えることも有効かもしれない。

○あいさつは、最初の第一声を発するのが難しい。ここを乗り越えられるような支援が必要か。

○登校班のあいさつの取り組み・・・各登校班で目標を立てて、リーダーが自覚をもって「あいさつ」への取り組みをさせてみてはどうか。そして、ここでも班ごとの「競争」（お互いに刺激し合うこと）が有効だと考える。

3 学校教育全体に関わって

○マスコミ（CATV、地方新聞）を逆に利用するのはどうか。子どもはそもそも「ええかつこ主義」なので、やったことが他から評価されるように仕組むことは有効だと思われる。

○子どもたちなりに、未来に向けての、身近な課題、より近い目標を持たせたい。

4 学校や教職員への期待とエール

○家庭ですべきことは基本的なしつけである。しかし、その子の将来に関わる「夢」の様なものは学校でしか教えられる。我が国では、学校が背負っている負担が多すぎるし、先生は求められるものが多く大変である。しかし、好きで選んだこの職業であるし、学校でしか教えられる大切なことがあるので、誇りを持って頑張っていて欲しい。私たちも応援している。

5 今後の課題

○基本的には、学校から提示された「2学期の具体的改善プラン」5項目に向けて努力されたい。

○私たちが、学校関係者評価委員会として、今回教職員の皆さんに伝えたいキーワードは、
・授業の中で ・お互いに刺激し合う（良い意味での競争）
・やったことがみんなに認められる工夫 ・マスコミの逆利用
である。